

■作法叢書■

高校演劇の作り方

東京都高等学校
演劇研究会



明治書院

作法叢書 ■

高校演劇の作り方

東京都高等学校
演劇研究会



明治書院

作法叢書 高校演劇の作り方

980 円

昭和52年11月15日 初版発行

昭和53年 9 月20日 再版発行

著 者	東京都高等学校演劇 研究会
発行者	株式会社 明 治 書 院 代表者 三樹 彰
印刷者	精 文 堂 印 刷 株 式 有 限 公 司 代表者 西村弥満治
発行所	株式会社 明 治 書 院 東 京 都 千 代 田 区 神 田 錦 町 1-16 郵便番号101 電話 東京 (03) 292-3741(代) 振替口座 東京 3-4991

〈検印廃止〉 0374-23233-8305 製本 徳住製本

・落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

学校と演劇

——はしがきにかえて——

演劇は、絵画・彫刻・映画・文学などと並ぶ芸術の一つのジャンルです。芸術とは人間が、より高いもの、より美しいもの、より優れたものを目指して創り上げる、価値あるものといったらいいでしょう。演劇というものを抽象的に説明すれば、いろいろ言い方があろうと思いますが、理屈を言っても意味がないような気がします。この本は具体的に演劇の様々な技術を学ぶ目的で書かれているのです。

うれしくてたまらない時、子供はどんな行動をとるでしょうか。とび上がったたり手をたたいたりしながら、喜びを他に伝えようとします。それがそのまま演劇とは言えないかもしれませんが、身体全部を使って、夢中になって自分の体験を他に伝えようとする。そうした子供の姿には、演劇的と言っているほどの肉体表現があります。

学校にもいろいろな行事があります。たくさんの人が参加して行う式・運動会などの中にも演劇的な何かがあります。退屈で、早く終わればいいと思う時もあるれば、感動して時間を忘れる時があります。舞台と観客席との交流によってかもし出される演劇的な雰囲気があるところにあります。

すばらしい先生の講義を聞いていると、我を忘れてしまう時があります。いつの間にか生徒たちを観客の立場から演技者の立場に引き上げてしまう。演劇的な興奮がそこにあります。

演劇とは夢中になって身体で何かを表現する芸術で、言葉はその一部分であると理解すればいいでしょう。その言葉の部分を脚本と言ったり、戯曲と言ったりします。戯曲は演劇を構成する主要な部分であると同時に文学の一つのジャンルでもあります。

学校で演劇が行われる場面が二つあります。一つは授業で演劇を教える場面、もう一つは課外の各部活動と必修クラブの活動で演劇を創り上げて行く場面、この二つです。授業では、国語の授業で、戯曲を読んで、その内容を理解する程度で、これは演劇を学ぶとは言えないかもしれません。しかし劇を創っていく場合に、一番初めにしなければならないことは繰り返し脚本を読んで、はっきりしたイメージを思い描くことにあるわけです。そのイメージをふくませ、身体表現によって、舞台の上に生きた世界を創り上げて行くわけです。基本的には、どちらも違った行き方をとるわけではありません。

残念ながら日本には、長い間「ものを言わないこと」を美德とするような習慣があつて、人前で意見を言うことを嫌うように教えられてきました。最近それが改められて、教科書などでも、人前で話す、討論する、意見を述べるなどが取り上げられるようになりましたが、それらの教育が意外に軽んじられ、記憶力のいいことだけを評価するような、間違つた教育が行われています。入学試験制

度の問題もあって、具体的に身体を使って理解していく仕組みより、抽象的なものの理解を重視する傾向があります。

しかし創造力を養うことが、教育の目的の中で、もっとも重大なものであることは、異論をさしはさむ余地があるまいと思われます。創造力を養うには、表現技術を学ばなければなるまいと思ひます。ことばとからだによる表現教育を、これからの日本の学校教育の中で、しっかり位置づけなければいけない。つまり、演劇を、学校教育の中に盛り込まなければいけないと思うのです。

演劇の勉強は、具体的に身体を動かして、自分の身体をコントロールする所から始めなければなりません、それとは別に、本物の芝居を数多く観^みること、たくさん戯曲を読むこと、戯曲を読むことに慣れることなどが挙げられます。その中で何が一番大切かということになれば、本物の舞台を観ることだと言わざるを得ません。テレビで芝居を観ても観たことにはなりません。たくさん観客の中の一人になって、幕の開くのを待っている。ベルが鳴り、客席が暗くなり、幕が開く。舞台の上に展開される世界は明らかに現実のものではないのに、いつの間にかその中に飛び込んで、主人公の喜びや悲しみを、自分の喜び、悲しみと感ずる。その状況を何度か味わわないと、演劇が分かったとは言えないのです。演劇とは面白いものだと思う、その面白さをまず生身の身体で感じとって欲しいのです。

そして演劇を創ってみたいと思う。学校の演劇部に入って、実際に活動してみる。そこでこんど戯

曲を読むという作業に入ります。高校演劇脚本集、アマチュア演劇脚本集など様々な本が出ています。それらを読んでみることは決して無駄ではありませんが、シェイクスピアや、モリエールなど、名作といわれる作品をもどしどし読んだらいいと思います。

ところが戯曲は、小説などと違って、上演を目的として書かれているわけですから、どうしても書かれ方が不親切です。小説なら一度読んで理解できるのに、脚本の場合にはその十倍ほどのエネルギーを費やさないと頭に入って行きません。上演する場合には、さらにはっきりと、具体的にイメージを固めなければならぬわけです。何度でも繰り返し読み返さなければなりません。それは大変な仕事です。しかし考えてみれば、難しいからやり甲斐^ががあるとも言えるわけです。

以下、この本に書かれた演劇についての様々な事柄を理解すると共に、具体的に劇創造に励んで欲しいと思います。

目 次

学校と演劇——はしがきにかえて——

第一章 脚本の創作と選択

I 脚本の創作の実際——短編「隅田川」が出来るまで——……………二

(一) 脚本の創作にあたって……………二

(二) 脚本の創作の具体例……………四

(1) 創作の出発点 (2) 創作の順序 (3) 創作の実例

(三) 脚本を創作してみても……………七

〔参考〕 脚本「隅田川」一部と作者ノート……………九

II 脚本の選択の実際……………三

(一) たくさん読んで……………三

(二) 脚本は自分たちでも創れる……………五

(三) さまざまな条件……………七

(四) 続、さまざまな条件……………三

第二章 演出と演技

I 演出の実際

(一) 演出について	三〇
(二) 演出の仕事の実際と順序	三三

- (1) 戯曲を発見する (2) 戯曲を読みとる (3) 配役を決定する (4) 演出のプランを立てる (5) 稽古場にて (6) 舞台稽古から本番へ

〔参考〕 演出プラン——佐藤信作「地下鉄」一部	六一
-------------------------	----

II 演技の実際	六四
----------	----

(一) 高校生の演技の準備	六四
(二) 専門俳優の演技と高校生の演技	六五
(三) 高校生の演技訓練の方向	六七
(四) 日常の稽古の仕方	七〇

- (1) からだに実感を取りもどす (2) 創造力とイメージ (3) 集中と解放
(4) 観察と模倣 (5) セリフ (6) 身振り (7) その他の稽古

第三章 劇の上演

〔参考〕 野口体操……………	六九
(四) いろいろな注意……………	六七

(一) 観客と舞台……………	六三
(1) 舞台の焦点 (2) つりあいのとれた配置 (3) コントラスト	
(二) 登場と退場……………	六四
(三) 公演と稽古……………	六五
(四) 舞台監督の実際……………	六六
(五) いろいろな付け帳とその記入例	
(1) 大道具付け帳 (2) 小道具付け帳 (3) 照明付け帳 (4) 効果付け帳	
(5) 俳優付け帳	六七
(六) プロンプターの必要性……………	六八
(七) 幕の開閉の仕方……………	六九
(八) 舞台に出るときの注意……………	七〇
〔参考〕 舞台監督のプラン……………	七三

第四章 舞台美術

I 装置の実際………

- (一) 装置を語る前に……………二〇
- (二) 基本的姿勢……………二一
- (三) 装置の十原則……………二三
- (四) 装置図設計のための準備……………二三
- (五) 装置製作までの手順……………二四

(1)スケッチ (2)模型舞台 (3)装置図

- (六) 大道具と小道具の作り方……………二七

(1)いろいろな大道具 (2)いろいろな小道具

- (七) 装置の色彩……………二四

- (八) 装置に関する重要事項……………二五

- 〔参考〕 主な道具図……………二七

II 照明の実際……………二六

- (一) 電気の時代に入って……………二六

- (二) 電気の照明のすべて……………二九

Ⅲ

音響効果の実際

〔参考〕

照明器具

(五)

照明の参考と注意

- (1) 学校の講堂の分電盤と配線
- (2) たき火
- (3) サイリスタ式調光機

(四)

照明計画

- (1) 舞台
- (2) 照明の変化
- (3) 光の色

(三)

舞台照明の仕方

- (1) 全体照明
- (2) 部分照明
- (3) ホリゾントライト

- (1) 電気の法律
- (2) 電力・電圧・電流
- (3) 許容電流・容量
- (4) 電線の注意
- (5) 分電盤の操作
- (6) 調光機
- (7) いろいろな照明器具

(一)

「ナマ」の音

(二)

音響機器による音

- (1) テープレコーダー
- (2) 円盤とプレイヤー
- (3) アンプとマイクロホン

(三)

効果の計画と操作上の留意点

- (1) 事前の準備
- (2) 操作上の注意

(四)

効果の注意

- (1) 録音
- (2) 外部スピーカーのインピーダンス

(四) 音楽効果	一五九
IV メーキャップの実際	一六二
(一) 心あまりて詞足らず	一六一
(二) メーキャップの技術	一六三
(1) 自分の顔を知る	
(2) メーキャップの材料	
(3) 基本	
(4) 明暗の法則	
(三) メーキャップの応用	一七三
V 衣裳のすべて	一七四
(一) 虚構と衣裳	一七四
(二) 衣裳係の仕事	一七五
(三) 衣裳の材料	一七七
(四) 衣裳の調和	一七六
(五) 衣裳の点検	一七九
(六) 衣裳の管理と注意	一八〇
〔参考〕 衣裳の典型 (舞台写真より)	一八四
第五章 部・クラブ運営の実際	
I 演劇部の場合	一八六

(一) 運 営	一八
(二) キャスト・スタッフと組織	一九
(三) 予 算	一九
(四) 年間スケジュール	一九
(五) 日常の注意	一九
〔参考〕 演劇部年度活動計画表	一九
Ⅱ クラブの場合	一九
(一) 部との相違点	一九
(二) 必修クラブの年間スケジュール	二〇
(三) 展開の留意点	二〇
〔参考〕 昭和 年度クラブ活動計画表	二四

あ
と
が
き

〔付録〕

- (1) 上演許可願書式
- (2) 機器・道具販売店

写真提供 江口寿男

第一章

脚本の創作と選択



榎原政常作「隅田川」都立上野高校上演

I 脚本の創作の実際

——短編「隅田川」が出来るまで——

(一) 脚本の創作にあたって

一人一人の考えを、舞台でナマの人間（演技者）に順を追って動いたり、しゃべらせたりするのを、ことばで表現したものが脚本です。

脚本の特性

ここで間違えてはいけません。演劇は「講演」ではないのです。作者が一方的に自分の意見を観客におしつけるのではないのです。観客は単なる受動的な「聴衆」ではありません。観客は積極的に「演劇」の制作に参加しているのです。つまり観客は一応黙って観てはいるものの舞台で行われている「演劇」を、第三者として冷静に「判断」しているのです。例えば舞台の人物が、まぬけな動作をやったり、トンチンカンな返事をしたりすると、観客は笑います。「笑う」というのは観客の「判断」「批判」であります。「さあ笑え」と言ったって笑うものではありません。自然と「滑稽だ」という判断が出て来るように持って行かねばなりません。これが脚本の特性の一つです。

観客の在り方

「演劇」の観客は、いろいろ特殊な性質を持っています。一番大きな特性は今言いましたように「舞台」に対して「判断」を示すことです。殊に喜劇の場合には観客が笑ってくれる時とくれない時とでは舞台の出来が違います。急所急所でよく反応してくれば舞台も次第に熱がこもり、舞台に熱がこもれば観客もますます強く反応してくれます。積極的に「演劇」の制作に参加していると言ったのはそういう意味です。

再び脚本の特性

だから脚本はそういう反応を引き出すことの多いものほどうい舞台になる可能性があります。つまり、くどいようですが、もう一度言う、脚本というのは、作者が「講演」のように一方的に自分の思想・感情・意見を述べ立てるものではありません。あるいは登場人物のそれぞれに単に問答の形で代弁させるのも同じことです。現にナマの人間たちが、実人生におけるのと同じように、愛したり憎んだり、笑ったり怒ったりして反応し合って「生活」している、その「生活」の一断面をつきつけるものなのです。そしてその「生活」に対する「判断」は観客にゆだね、作者は一切指図をしないという性質のものです。作者は観客に「判断」のデータを提供しておくまでのことです。

創作と選択の関連

そういうやり方で、自分の言いたいことを、さりげなくつきつけるのが「脚本創作」です。